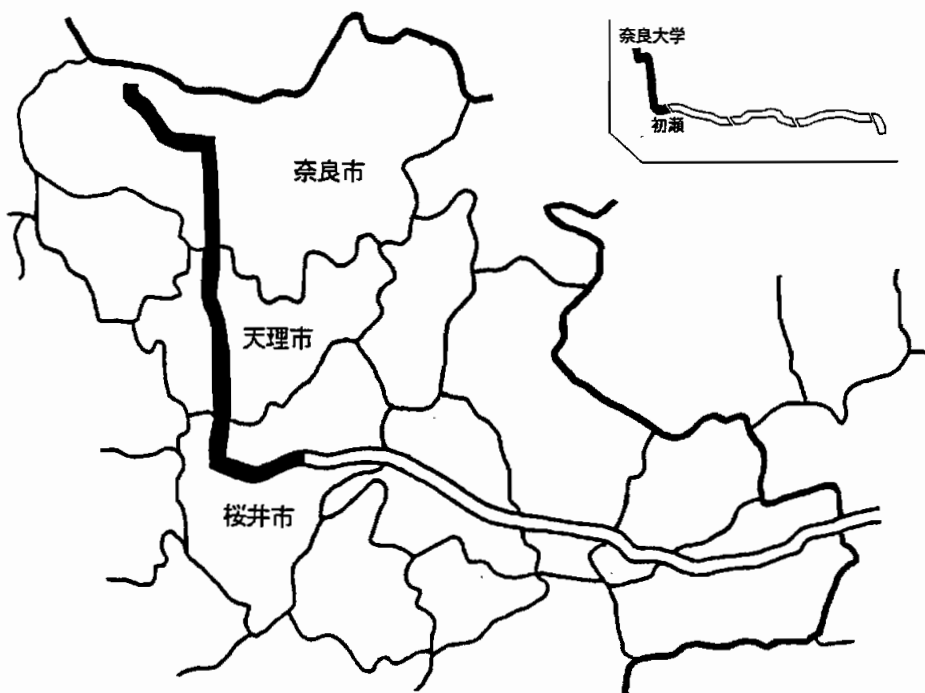


# 1 日 目

奈良市山陵町（奈良大学）～ 桜井市初瀬 約33.4km

奈良大学 - 山陵八幡神社 - 佐紀町 - 三条大路 - 大宮町 -  
奈良市街地（三条、橋本、樽井、今御門、勝南院、中新屋、元興寺、井上、辻）  
京終 - 帯解 - 椽本 - 天理 - 丹波市 - 三昧田 - 柳本  
纏向 - 芝 - 三輪 - 金屋 - 慈恩寺 - 黒崎 - 出雲 -  
伊勢辻 - 初瀬（吉野館）



いよいよ宝来講の出発。1日目は、大学から奈良市街地に出て、上街道を一気に南下。奈良盆地東南端、長谷寺の門前町、桜井市初瀬までのコース。初瀬は古代から「東国への出入口」といわれ、伊勢を目指す宝来講には、まさにぴったりの中間目標。平坦な道が続き、体力・気力もまだ十分。鼻唄混じりの道中である。ただ、この1日目には、三条通という難関がある。人々の好奇の視線に耐え、これをやり過ごしてから、ようやくスタートという気分になることが多い。また「平坦な道だから」「まだ元気だから」と走り回ったものには、翌日以後、きっちりツケが回ってくることも忘れてはならない。

## 出 発

宝来講出発の朝。前日の最終寄舎を終えて、準備は万全?のはずである。史学科実習室に続々と参加者が集まってくる。江戸時代の旅人の朝は、俗に「七つ(午前4時)発ち」などという。これはかなり早い部類としても「朝六つ(午前6時)」は一般的であり、それでも今よりはかなり早い。宝来講の朝はそれほどでもないが、午前7時30分集合、8時出発。日頃寝坊をしている者には多少つらい。朝が早いと、遠距離通学の自宅生などの中には、友人の下宿に泊まってくる者もある。

実習室を、妙に興奮したあわただしい空気が包む。サポート車に皆の大きなカバンや荷物を積み込む者、自分の装束をつける者、歩数計などをチェックする者、思い思いに準備を整える。8時少々前に実習室をあとにする。法被、ひしゃく、瓢箪などをつけた一同が、奈良大学A棟(本部・研究棟)の前に勢揃いして、セレモニーが始まると、出発は目前である。

### 出発セレモニー

このセレモニーも、ただ形式的なものというだけではない。目的はふたつ。近世伊勢講の形を借りるのだから、その背景である村共同体にも目を向けねば不完全だ。伊勢講による参宮の多くは講員の総参りではなく、くじなどで選ばれた者だけが行く、いわゆる「代参」であった。代参者は村の代表であり、参宮を終えて村に帰れば、神に近づいた存在として扱われる。村と参宮者を切り離して考えることは出来ない。宝来講の場合、村にあたるような共同体はないが、もっとも近い存在は「奈良大学」であろう。セレモニーで戴く挨拶だけを聞いていればピンとこないが、こう考えてみると学長先生や学部長先生など、いままで挨拶を賜った方々の顔は、庄屋さん、あるいは年寄役、でなければ宮座の一臈(いづら)…に見えてこないだろうか。

そして、いまひとつ。伊勢参宮に限らず、宗教聖地巡拝などの旅人に対して、旅費や食事などを施す習慣がある。「施行(せうぎょう)」という。現在でも四国では「お接待」という言葉が生きており、遍路に対する施しは大師への供物、と考えられている。そこで、である。「近世の習慣を再現する」との大義名分により、セレモニーに集まった関係者から、堂々と援助を受ける(強要する?)ことが出来るのである。貧乏所帯の宝来講にとっては、こちらが主目的だという噂もないではないが、最近では内実を知った大学関係者が見送りに出てこなくなった、とか――?



サポート車への積み込み作業(第3回)

出発! (第8回)



## 「歴史の道」

いよいよ出発である。セレモニー終了の後、先達の声を合図にスタート、さっそうと裏門を出る。全員、これから始まる未知の旅路に向かい、意気揚々と歩いていく。

裏門を出てすぐ喫茶「風恋入」前の坂道を登る。丘を越えてカーブの後、つき当たりを左折する。約150m歩くと右手にのどかな田園風景が広がる。遠方に奈良競輪場が見えるほか、西大寺周辺の景観を一望に見渡す事ができる。

約700m歩くと左手に全長275mの神功皇后陵が見えてくる。神功皇后は『日本書紀』巻第九に氣長足姫尊として記される4世紀後半頃の人物であるが、実在したかどうかは定かでない。仲哀天皇の皇后であったが、天皇崩御ののち、自ら軍を率いて熊襲・新羅征討に赴いた。その帰国後、筑紫（福岡県）において第15代応神天皇を生み、その即位までの69年間、摂政として武内宿禰と共に政治を行ったという。

神功陵に連なる森が山陵八幡神社である。大学が移転し、現在のコースとなつてからは、例年この神社に立ち寄って、道中の安全を祈願している。西側から神社へ登る坂道もあるがそれは登らず、約150m先左手の鳥居をくぐり、神社正面の石段を登って参拝する。

### 山陵八幡神社 参拝

---

これから伊勢までの約130kmの旅の安全を祈願する。先述のように、村共同体を背景とする近世の参宮にとって、氏神への道中安全祈願は、欠かすことのできない行事であった。宝来講においては「村共同体」も「氏神」も仮のものとはいえ、近世の旅再現を標榜する以上、こも近世の旅人になりきっての安全祈願である。大学所在地（山陵村）の氏神とはいえ、我らの講は名前に「宝来」を冠したままなので、若干の矛盾あり。実は大学が宝来町にあったころも、隣町・菅原町の菅原天神で安全祈願していた。この点は「再現」ゆえのこととして御理解願うことにしよう。参拝の作法は、まず二礼し、拍手を二回打ち、最後に一礼して終わる。一同、ここで履物を微調整し、この先の旅路に備える。

---

参拝が終わると石段を降り、伊勢を目指して再び歩き始める。近鉄京都線の踏切を渡り、最初の十字路を左折、すぐ「歴史の道」の石灯籠が立つ分岐点を右へ登る。

約300m歩くと前方後円墳に挟まれた道になる。右手は成務天皇陵、左手は日葉酢媛命陵である。この一帯は佐紀盾列古墳群と呼ばれ、重要な古墳が集中している。深い緑と濛に囲まれた小径は、ときおり自転車や散策の人が往来する程度。古代の雰囲気が満ちあふれている。

第13代成務天皇は稚足彦天皇として『日本書紀』巻第七に記述があり、日本武尊の弟にあたる。記述そのものは短いが、国郡に造長、県邑に稲置をおいて支配したという。また日葉酢媛命は『日本書紀』巻第六に第11代垂仁天皇の皇后として記述がある。媛が亡くなったおり野見宿禰が、殉死の代わりに土で作った人馬で霊を慰めることを天皇に進言、出雲国より土部を呼び寄せて土の人馬を作ったことが埴輪の起源となつたとしている。しかし、宮内庁管理の陵墓であるため、考古学の成果もなく実証に乏しい。

ここから、歴史の道の標識に次のポイント「佐紀神社」の名が見えるので、これに従って進む。林を抜けて左に曲がると山上八幡神社があり、この前からは歴史の道の石標が約100m毎にある。八幡

神社より約300m歩くと御前池がある。その手前にある標識から、この標識が「佐紀神社」を示す方向とは逆に、御前池東側に沿って進む。正面に佐紀幼稚園が見え、つきあたりを左折すると左手に大社佐紀神社がある。佐紀神社は御前池を挟んで東（字亀畑）と西（字西畑）に鎮座している。佐紀神社の標識とは逆に進んだのに、また佐紀神社があらわれるとは奇妙なものである。

佐紀神社の祭神は天兒屋根命・経津主命・六御巢命であるが、度会延経の『神名帳考証』は道祖神とする。社伝によると、天武天皇2年(673)に鎮座し、超昇寺（現廃寺）の建立に伴い鎮守神として尊崇されていたが、治承4年(1180)と天正6年(1578)の両度、兵火によって焼失したという。江戸期の古図には「二条宮」とあり、『大和志』には大宮と称したとある。西畑にある同名社は江戸期の古図にはみえず、『平城旧社考』では亀畑の社から分祀したと伝えている。江戸末期に分祀されたのであろう。

また、佐紀幼稚園の裏手には隆光大僧正(1649～1724)の墓石があるが、正面から見えず、案内板が道沿いに立っている。

大社佐紀神社より約150m歩くと右手に平城宮跡が現れる。ここが平城宮跡の北端である。宮跡に沿って約100m歩くと三叉路に出るが、それを左へ進み、みやと通り（歌姫街道）に出て右折する。約200mで佐紀駐在所横の交差点に出て、信号を渡り、平城宮跡内の遊歩道を歩く。

平城宮は、和銅3年(710)に藤原京より遷都、造営された平城京の大内裏で、東西1.3km、南北1kmの広さがあった。大極殿および朝堂十二堂の土壇が復元されている。昭和34年(1959)より発掘調査が行われ、現在も続いている。瓦・土器・箸・櫛・まげもののほか、歴大な量の木簡が出土しており、今後の成果が期待される。

遊歩道は近鉄奈良線の手前で東に向きを変え、みやと通りに合流して踏切を渡る。池を配したシルクロード博記念館を右手に見て、約250m先の路地を左折し、蔵の目立つ狭い道を行く。左手に正行

#### 古代と現代の接点を歩く

平城宮跡の道を行けば、あたり一面が古代遺跡の宝庫。しかし最近話題となったのは、ごみ箱撤去問題であった。ごみ箱があるから観光客や市民がごみを残していく。いっそ撤去してしまえば持ち帰ってくれるのでは一という発想からの「作戦」である。その後の成果もまずまずとか。一方、宮跡南部には近鉄奈良線が通っており、最長10両の電車が頻りに行き来する。「古代宮跡」と「ゴミ問題」。「古代宮跡」と「ラッシュアワー」。まさに「古代」と「現代」がここに接している。



平城宮跡に行く（第3回）

沿道のまち① 奈良市（奈良県） 人口357,302 所帯数124,380 面積211.60km<sup>2</sup>

（人口、所帯数などのデータは平成5年11月末～12.1現在。以下各市町村とも同じ）

〔沿革〕 明治22年町制、同31年市制施行。その後合併で次々と市域を拡大、昭和32年現在の市域に。

〔概況〕 西部は住宅地、中心部は旧市街地、東部は山間地域。広大な市域の大部分はこの東部に属する。

〔街道〕 西から市街地へは暗越奈良街道（三条通）、北からは京街道（奈良坂越）、南からは上街道（伊勢街道・初瀬街道）や中街道（高野街道）、東からは伊賀街道（奈良坂で京街道と合流）と、まさに四方から道が集まる。宝来講では、市域北端から暗越道、上街道を通して、南の天理市へ抜ける。

寺、北新天満宮があり、正面には奈良そごうが見えてくる。建設の際に多数の木簡が出土、<sup>ながやぶ</sup>長屋王の邸宅跡として脚光を浴びた。長屋王は<sup>てんむ</sup>天武天皇の孫として生まれ、養老5年(721)藤原不比等の死後の右大臣、神亀元年(724)聖武天皇即位と共に左大臣となり、藤原氏に対抗する勢力をなしたが、天平元年(729)密告により自殺した。この奈良そごうの西北角で国道24号線<sup>おのみち</sup>大宮バイパスの高架をくぐり右折、24号線の東側歩道を南へ進む。

大宮通り(阪奈道路)と交差後、三条大路二丁目交差点(奈良シティホテル前)を左折、三条大路(県道1号線、<sup>くらがりごう</sup>暗越奈良街道)に入る。ここより<sup>さかさ</sup>猿沢池までは、三条大路の旅である。

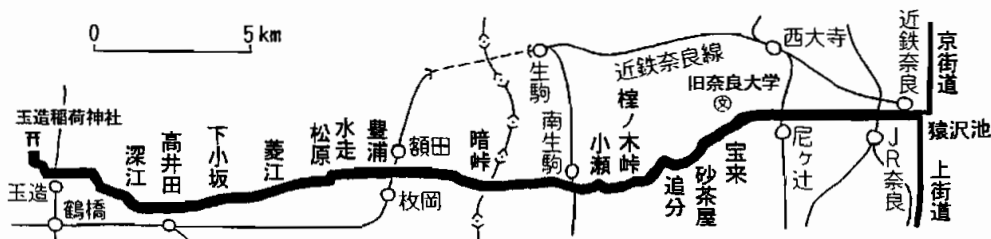
この道は、幕府から脇街道に指定されていた。享和・文化年間(19世紀初頭)に幕府が製作した<sup>ぶん</sup>分間絵図(『<sup>かたごころ</sup>加太越奈良道見取絵図』)が残されており、非常に質の高い参考資料になる。

### 暗越奈良街道

三条大路は古代より存在する古い道路で、平城京の時代には都城の中の主要道として、またその延長は難波地域への最短距離として重要視された。中世以後は暗越奈良道(奈良側では暗越大坂道)と呼ばれ、豊臣期に本格的に整備された。江戸期には玉造二軒茶屋(現在のJR大阪環状線玉造駅東側)が起点とされ、参勤交替や大坂～奈良間の物流商業路、また奈良の諸寺や長谷寺への参詣路、伊勢参宮の道としてもにぎわった。

玉造を出た道は、国道308号線と近鉄奈良線の間付近を東進、深江、松原などを経て生駒山系に突き当たる。これを一気に登るのが暗峠の道である。生駒山系は西側に険しく、東側に穏やかなので、東進するときの厳しさはひとしおだ。峠の頂上付近が大坂・奈良県境になるが、当時の面影を偲ばせる石畳が残っている。下り道は登り道ほどの険しさもなく、やがて近鉄生駒線・国道168号線の通る生駒谷に下りてくる。これを横切って今度は榎ノ木峠を登り、矢田丘陵の北端部から富雄谷へ向けて下る。この途中には「追分」という地名が残り、郡山方面への道を分ける。茶屋本陣や道標も建っている。さらに下って、砂茶屋で富雄川を渡る。東坂、宝来と東進、尼ヶ辻で近鉄橿原線と交差、旧都跡村内を一直線に進んで三条通につながっている。

宝来町旧キャンパス時代の宝来講は、垂仁天皇陵西側付近からこの道に入っていた。また、今でも足らしとして、毎年本番前の時期に、額田～奈良(約19km)を歩くことにしている。



### 三条大路

現在の三条大路は、自動車の往来が激しい。歩道もあるにはあるが、申し訳程度の整備状態で、歩行者にとっては非常に歩きづらい。しばし我慢の旅となる。

まず<sup>ひづか</sup>菟川橋(菟川)を渡る。しばらく行くと、左手に県営プールがあり、変電所前交差点を越え、<sup>たか</sup>高橋(佐保川)を渡る。佐保川も古代より存在する古い川である。平城京の排水路として、右京の<sup>あき</sup>秋篠川とともに重要な役割を持っていた。

三条栄町交差点を直進し<sup>しろふじ</sup>白藤高校前を通り、JR関西本線の踏切を渡るとJR奈良駅前の広場北側に出る。広場には2基の常夜灯が立っている。南側は文久2年(1862)に建てられ、八幡大菩薩・天照



皇大神・春日大明神の神号が三面に刻まれている。北側は文化11年(1814)に建てられ、火袋石前面に金比羅大権現の神号を刻み、竿石に藤栄講、台石に三条西町・三条村中、そして墨屋治郎兵衛を筆頭に寄進者の名前が刻まれている。

### 三条通

JR奈良駅前の交差点を渡って、三条通商店街に入る。奈良市街地で最大の繁華街であり、銀行・ホテル・書店・レストラン等、現代の新しい建物と、清酒・骨董・筆墨・漢方薬・大和茶・奈良漬等を商う老舗が混在して、独特の賑やかさがある。近年、歩道の整備が行われ、新しい店舗の進出が激しいが、昔ながらの老舗も多い。少し詳しく見てみることにしよう。

JR奈良駅前の交差点を過ぎると、ダイエー、ニノミヤ、ジョーシンといった大型店舗の並ぶ一郭がある。このあたりには近世の建物は見当たらない。初めて街道らしい家並が見られるのは、JR駅前の交差点から200mほど進んだ付近になる。道の右側に清酒「男魂」の岡村酒造と、漢方薬の菊岡が古い店構えを残している。岡村酒造は近年ガラス戸や店内を改装したが、従来の建物をうまく生かした部類といえる。菊岡の店先にあった「總本家さくおか」の石標は、残念ながら、平成4年(1992)春の自動車突入事故で折れてしまったが、店構えは事故前そのままに復元された。



奈良市街 奈良町

0 100m 1:10000

菊岡の店先には覆堂のかかった地蔵があるが、『加太越奈良道見取絵図』の三条村付近にもそれらしき小祠が見えているので、このあたりからが近世の三条村になるのであろう。この一郭を通るときは菅笠、法被に草鞋履きが妙に絵になる。しかし、宝来講を知らない人々にとっては、仮装行列のようでも見えるのであろう。冷やかな視線・冷笑・苦笑をいただくことにもなる。

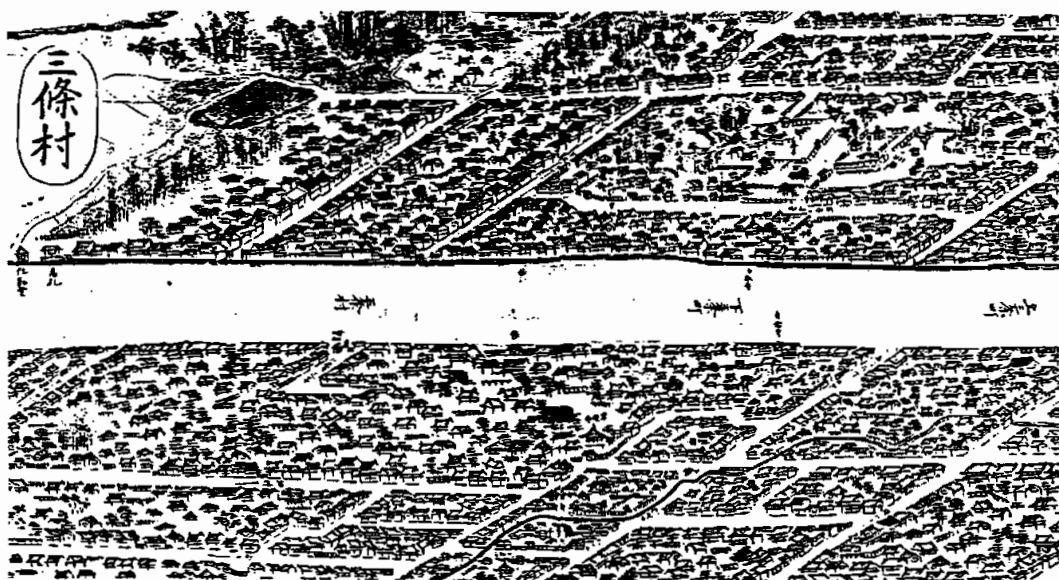
JR駅前から約300m歩くと、左手に開化天皇陵がある。開化天皇は第9代天皇で、『日本書紀』巻第四に記述があるが、事績の記述はなく、その存在が疑問視されている。

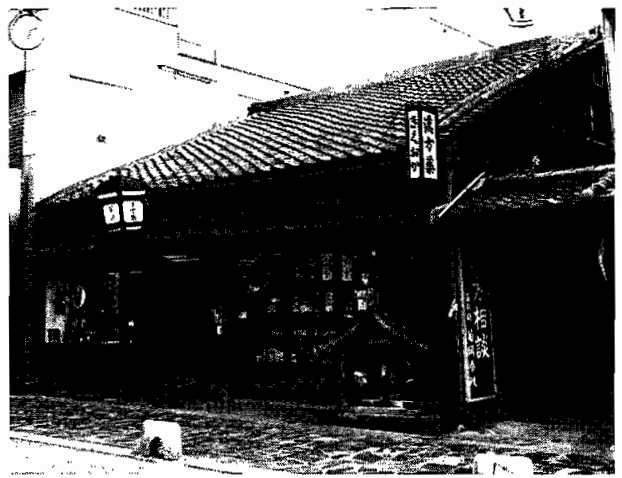
ホテルフジタ奈良、NTT奈良営業所、奈良銀行など、比較的大きなビルの建ち並ぶ中を抜けると、左手に真宗本願寺派の浄教寺、右手に真宗大谷派の専念寺がある。近世の奈良町絵図を見ると、この一角は「寺町」のようにになっているのがわかる。

正面に信号のある交差点が見えてくる。「やすらぎの道」である。左側、交差点北西角に「奈良市観光センター」があり、小休止する。ここで草鞋の者はその履き具合を確かめ、調整する。市販の草鞋の中には、ここで早くも使用不能、という例があった。ちなみに、ここは旧奈良郵便局の跡地である。局舎が手狭になったが増築の用地がなく、周辺の道路も混雑が激しくなってきたため、大宮地区へ移転した。同じような事情で、旧市街地から大宮へ移転する公共施設が多く、奈良町の東寺林にあった市役所も移転して、跡地は「ならまちセンター」となっている。

再び歩き出して「やすらぎの道」を横断すると、また小規模な商店が並ぶ。骨董の珍壺亭、筆墨の一心堂、大和茶の仲家、中室金物店などが、古い建物で残っている。改装で若干手を入れているが、奈良漬の今西本店、ぜいたく豆本舗も、建物自体は古かろう。意外なのは三条会館レジャービルである。奈良大生には「天まであがれ」三条店、といった方が馴染みの建物かもしれない。表からは気がつかないが、側面や裏側を見ると、年代物のビルであることがわかる。

右側に紫色の外装も毒々しいシネマデプトを見て進むと、十字路に出る。左側には「さくら通り」（1992年12月に小西通から改名）のゲートがあり、これを北へ抜ければ近鉄奈良駅へ出る。反対に、この辻から南へ向かう道は中街道。この先、城戸・木辻・横田を経て国道24号線の西側に並行し、八

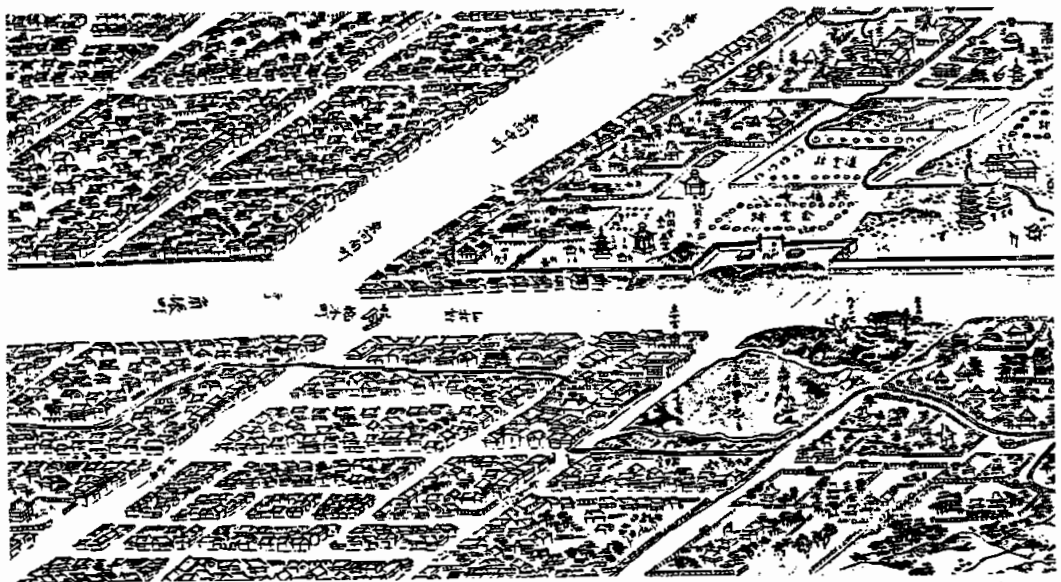




三条通 菊岡の店構え

木（橿原市）・土佐（高市郡高取町）・檜垣本（吉野郡大淀町）・下市（吉野郡下市町）方面や、五  
 条（五條市）、高野山（和歌山県伊都郡）方面へ至る道である。高野街道とも呼ばれ、上街道とともに  
 奈良盆地の南北交通を担う重要な街道であった。辻から南へ2軒目東側には、朱塗りの鳥居と柵が  
 目立つ単神社と延命地藏尊がある。ビル群に押され気味の小さな空間であるが、延命地藏の本尊・木  
 造半跏像は13世紀前半の作というから、奈良の奥深さを知らされる。

さらに直進すると、右側に道から少し下って大きなゲームセンター「AD YURAKU」があり、その  
 少し先の左側には、優雅にして豪壮な南都銀行本店が建つ。この東側の角の丁字路から左に入るアー  
 ケード付きの道は東向商店街で、これを抜ければ近鉄奈良駅の東口・行基菩薩の噴水前が出る。丁字  
 路を直進するとすぐまた丁字路があり、今度は右に同じようなアーケードの商店街がある。もちいど  
 のセンター街（餅飯殿通）である。このあたりが橋本町で、江戸時代にも奈良の中心地として栄えて  
 いた。当時は高札場が設けられており、道の左側には当時を再現して高札が掲げられている。



「加太越奈良道見取絵図」



餅飯殿通東側の角は、現在空き家となっているが、木造三階建てで一見旅館風の建物である。この空き家と東隣の春日物産との間、自動販売機の横に奈良市道路元標があり、近代になってもここが奈良の道路の基準点であったことを物語る(㊦)。

橋本町の東側は梅井町で、興福寺・春日大社や伊勢・初瀬に通じる上街道の入口に位置することから、江戸時代には多くの旅籠が建ち並んでいた。寛文10年(1670)の史料によると、町内に11軒の旅籠があったといい(『旅籠町』)、文久2年(1862)の『浪花講定宿帳』、明治15年(1882)改正の『一新講定宿帳』に、「小刀屋善助」の名前がみえる。

道路元標より約100m行くと、前方の視界がひらけ、猿沢池のほとりに出る。手前の榮女神社角を右折し、池の西側を南下して、いわゆる「奈良町」に入るが、宝来講一行は池のほとりで小休止としている。池越しに興福寺の緑が見え、五重塔が顔をのぞかせている。いかにも奈良、という光景であるため、テレビ取材のあった第1回(1986)では、塔を背景に歩いてほしいという注文が付いた。

出発が早く朝食抜きの者も多いため、ここでサポート隊からおにぎりの配給がある。

## 上街道の旅・奈良町

再び出発、猿沢池の西ほとりを歩き、2基の常夜燈の間を抜けて、率川に架かる小さな石橋を渡る。ここが初瀬へ向かう上街道の起点になるのであろう。現在の常夜燈は大正9年(1920)銘のものだが、「燈籠講」の旅籠案内本(明治初期)や一新講定宿帳(明治15年、1882)の絵図にも同じような常夜燈が描かれている。『大和名所図会』(寛政3年、1791)にはその描写がないことから、絵図の常夜燈は江戸後期に建てられ、現在のものはその再建と思われる。また、石橋の橋脚には「明和七年庚寅五月吉日」(1770)、「椿井町施主嶋屋嘉[ ]」銘の石柱が使用されている。率川の流れの中には、船型状の小さな中洲があって、たくさんの石仏が並べられているのも目を引く。

率川を渡ると今御門町に入る。奈良町は現在、奈良で最も古い町並を残している地域で、景観保存にも力を入れている。景観に配慮してアスファルトを土色としており、奈良市街地各所で見かける、春日大社の吊燈籠を模した街灯も、最初に導入されたのはこの付近であった。少々進むと、道は幅3mほどになる。近世の町場の中でもかなり狭い道だったのであろう。大人数の宝来講が通ると、軒先に触れそうな感じさえする。左手に猿田彦(道祖)神社のある辻で、道は少々東に食い違っただけでさらに南下、勝南院町に入り、旅館・料理屋・食料品店などの並ぶ町を抜ける。この付近には、近世の建物がかなり残っている。法蓮格子の残る家も見られる。

都市計画道路杉ヶ町高畑線をわたると中新屋町に入るが、この交差点東南角に新しい道標が立っている。さらに進むとまた古い町並が残り、家々の軒先には庚申信仰によるくくり猿が吊り下がっている。左側には町家の現代的再生を模索して新築された「鶯屋倶楽部」、飾り出窓のある藤村家など、右側には老舗の旅館「はり新」などがある。やがて道は丁字路に突き当たる。正面は菊岡工芸で、奈良の工芸品を取り扱っている。奈良町には良く似合う店構えである。

丁字路を左折した上街道は、菊岡工芸の2軒隣の辻井薬局角ですぐまた右折し、再び南を向く。左手に吉田蚊帳(ぼろ)があるが、蚊帳は江戸時代に繁栄した「奈良晒」の流れをくむ奈良の特産品である。この先の出屋敷町付近には今も蚊帳工場が並ぶ。

### 道路元標

明治政府の道路管理策の中で、諸街道の里程取調の基準点となっていたのが道路元標である。明治6年(1873)12月20日太政官達第413号に「(前略)東京は日本橋、京都は三條橋の中央を以て国内諸街道規程の元標となし大阪府及各県はその本庁所在地に於て四達枢要の場所へ木標を建て之を管内諸道規程の元標と定む可き事、但東京京都兩府は国内諸街道の元標を以て管内諸道の元標と致す可き事、各府県共管轄地界へ木標を取建てる可き事(後略)」とあり、道路元標が建っている道は明治初期に街道であったこと、当初の材質が木であったことがわかる。元標が石造になったのは、大正8年(1919)4月11日の『道路法』公布に伴う『道路元標二関スル件』(大正11年[1922]8月18日、内務省令20号)で「道路元標ニハ石材其ノ他ノ耐久性材料ヲ使用スヘシ」「道路元標ハ別記様式ニ依ルヘシ」と形状・寸法を示されてからであり、またその位置も「位置ヲ表示スル為道路二面シ最近距離ニ於イテ路端ニ建設スヘシ」と規定している(『鶴岡を歩く』)。



### 上街道と上ツ道

上街道は、奈良町から天理を経て、三輪までほぼ一直線に南北に通じている道である。この道を南へ行くと、天理市の南部で奈良期の計画道路・上ツ道と重なっている。

平城京と藤原京を結ぶ道として、下ツ道・中ツ道・上ツ道が計画された。下ツ道は平城京の朱雀大路より、中ツ道は左京四坊より、また上ツ道は左京七坊より、2.1km間隔で並行しながら南へたどる道であった。上ツ道の天理以北は山地となるのでプラン上の道と考えられているが、実際の道は山地を避けて西に寄っていたと思われる、この部分も上街道と重なっている可能性がある。

近世奈良盆地の街道も、西から下街道・中街道・上街道で名称は奈良期と似ている。上街道は上ツ道と重なることからこの名があるようだが、そのほかは名称に関連性がない。下ツ道は中街道として主要道の地位を保ったが、中ツ道は橋街道と呼ばれる地方道になり、利用は少なかった。

### 奈良町と庚申信仰

奈良町は、元興寺の旧敷地内にできた町である。平城遷都に伴って藤原京から移築された元興寺は、宝徳3年(1451)の土一揆と天文元年(1532)の一向一揆でほぼ廃虚と化す。永禄~天正頃(1528~92)にかけてここに民家が建ち並び、奈良町の基礎が作られた。江戸期に入り泰平の世となって商業が発展してくると、建物に対する様々な要求が生まれ、現在の町家の原型ができた。現在の町家は、間口が狭く奥行の深い敷地、道路に面した平入りの主屋(母屋)、その裏に坪庭、そして廊下でつながれた離れや蔵がある、という形式である。この町屋は、奈良町の中でも特に中新屋町・西新屋町・芝新屋町地域に多く残る。

菊岡工芸の突き当たりから、上街道を離れて右へ少し行くと、奈良町資料館の出口があり、町木戸が再現されている。館内には館の所有者・南氏の美術コレクションのほか、江戸期から明治期に使用された民具や看板、そして庚申信仰に関する品々が展示されている。資料館の前をさらに進み、左折すると庚申堂があらわれる。この御堂が奈良町の庚申信仰の中心となっている。

庚申信仰は、中国の道教の影響を受け、中世以来各地で行われた。十干の庚と十二支の申の組み合わせる日が庚申の日で、60日毎に巡ってくる。この日、人間の体内に潜む三尸(さんじ)の虫が睡眠中に抜け出し、天に昇って天帝に悪事を告げ、報告を受けた天帝はその人の寿命を縮めると言われている。そのため、この日には当番の家に集まって夜を明かし、帝釈天・青面金剛・猿田彦等の神を祭るほか、三尸の虫が嫌がるというこんにゃくを、天帝のいる北を向いて無言で食べ、虫が抜け出すのを防ごうとした。また、寿命を縮められぬように申のぬいぐるみをつくり、くくり猿(身代わり猿)として身代わりにしたり、庚申塚を建てたりした。江戸期には、この庚申を中心として数多くの講ができ、頼母子なども行って、相互扶助機関の役割も果たした。奈良町では青面金剛を祀っており、像は丈45cm、室町期から伝わる木彫彩色像である。

100mほど進むと、左側に元興寺塔跡が残る。元興寺は崇峻元年(588)、法興寺(飛鳥寺)として飛鳥の地に建てられたが、平城遷都に伴って霊龜2年(716)奈良に移り、現在の元林院町・猿沢池東通・築地之内町・餅飯殿通に囲まれた東西2町・南北4町の広大な地に中心伽藍を建立し、この際に元興寺と名を改めた。当時は南都七大寺のひとつとして、東大寺に次ぐ高い寺格を誇る寺院であったが、平安遷都以後次第に勢力を失い、わずかに奈良期の僧智光の描いた極楽浄土曼荼羅を中心とする浄土宗の道場として、庶民信仰のよりどころとなった。宝徳3年(1451)の土一揆と天文元年(1532)の一向一揆でほとんど廃墟になり、現在では極楽坊・観音寺・十輪院の建物のみが残っている。

左側にあらわれる土塀は御霊神社のもの。奈良町の氏神である。この先の辻で、道は若干西へ食い違っている。少し進むと、右側に洒落た建物の元興寺郵便局がある。この郵便局は奈良市内でもっとも古く、局舎も時代を感じさせるものであったが、昭和63年(1988)に建て替えられて、現在の局舎となった。古い郵便局は旧街道沿いにあることが多く、旧街道を捜すさいの目印にもなる。

右側に並ぶ古い民家を見て、十字路をひとつ過ぎると、右側2軒目に中將姫霊場の石碑のある高林寺がある。この付近が井上町で、江戸時代から書き続けられている『井上町中年代記』の町として知られている。第6回(1991)の時は、マンション建設反対の看板が目立っていた。近似的な町の機構にとって、マンションは大きな脅威である。また、道の左側、循環道路の手前一带の広いさら地は「国際交流センター」の用地で、これもまた町の機構に大きな影響があろう。この先どういった展開になるのか、関心を寄せたい。

## 京終

循環道路を渡り、中辻町に入ると、ここまでの町並よりは、若干密度がうすく感じられてくる。家屋と家屋のあいだに空間が増えてきたためであろうか。さらに進むと肘塚町に入る。道の東半分を占拠したように鎮座する祠は柗明神。文字通り柗の木を祀っている。家並を抜けたところに流れるのが能登川で、これを渡ると道幅が若干広くなる。この右側に常夜灯が2基立っている。ともに文政13年(1830)銘になっており、向かって右側のもは「金毘羅大権現」、左側のもは三面に「天照皇大神宮」「春日大明神」「八幡大菩薩」と刻んでいる。文政13年には大規模なおかげまわりがおこっており、それにかかわるものとして重要なものである。能登川は奈良の町の南端とされていたようで、こ



帯解地蔵

『大和名所図会』

のあたりを京終きょうぽてと呼んだ。現在もこの地名が残っている。

常夜灯より100mほど進むと、左側に不動明王石仏の祠堂がある。これが玄防僧正げんぼうの腕を埋めた塚であるといわれることから、「肘塚」の地名がついたとされる。玄防は遣唐使として唐に渡り、法相の教学を極めた高僧である。また、この不動堂の境内には付近の街道沿いにあったと思われる石造物が集められており、道標のほか、六字名号碑、回国供養碑、西国三十三所供養碑などがある。

## 帯解

京終を過ぎると、右手にはJR桜井線が並行し、市街地を離れ田園風景となる。左手には工場が並ぶが、特に蚊帳工場が目につく。先述のように、奈良晒の系統をひくものであろう。最近では同じ「透け物」の故か、レースの生産も多いようである。上街道はひたすら南へ進む。岩井橋（岩井川）の手前、右側に地藏堂がある。

300mほど進むと出屋敷でやしきで、小規模な集落がある。門亭酒店かどていの向かいに建つ井上家は、竹を格子に使っためずらしい外観である。これを過ぎるとしばらくは町並らしい町並もなく、建て売りなどの新しい住宅と事業所、それが途切れると水田がのぞく、といった風景の繰り返しになる。永井ながいに入ってまた小さな集落があるが、これもすぐ途切れ、田園風景となる。とても奈良の近郊を歩いているとは思えないのどかさである。

岩井橋から約2km、地藏院橋じぞういん（地藏院川）を渡ると帯解おびとの集落に入る。帯解は典型的な丘陵街村であり、帯解という地名も、「帯のように長い峠」を意味する「帯峠（おびとうげ）」の転訛と考えられる。

橋を渡るとすぐ、右側に子安山帯解寺（帯解子安地藏尊）があり、ここで小休止をとる。この寺は『大和名所図会』にも記載があり、そのほわりには地藏院川の流れも描写されている。平安時代、文徳天皇の皇后が懐胎した折、この地藏尊に祈願して清和天皇を安産したと伝えられる。このために古来安産祈願で知られており、帯解寺の名もこの故事による。本尊は鎌倉期の作といわれる木彫半跏像の地藏菩薩で、国の重要文化財に指定されている。

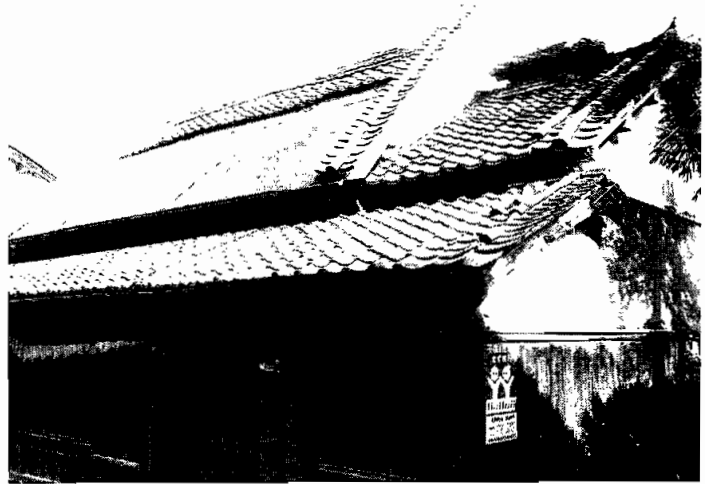
休憩を終えて上街道へ戻る。小さな坂を上がって十字路を越えると、奈良町以来ひさびさの落ち着いた町並となる。しかし、ほどなくこれは途切れ、前方が開けてくる。左側には宝寿山龍象資聖禅寺があり、帯解地藏奥の院と称している。この前で道は短い下り坂となり、丘陵は終わっている。再び田園地帯に出た道は、まっすぐに南下を続ける。

## 蔵之庄 大和棟の集落

帯解を過ぎると、道の右側は水田が開け、左側には新しい住宅が並ぶ道となる。しばらく行くと右側にも家が並びはじめ、田中町の集落に入る。街道の右側に沿っている民家は、すべて街道より一段低く建てられている。このような景観は、低いところにあった道に合わせて家を建てたあと、改修で道が嵩上げされてできあがることが多い。道の左側に較べて、右側には古い家屋が多いので、ここもそのような経緯によるものと思われる。その右側の家をよく見ていくと、軒に看板吊りの残る家（高原家）がある。同家はかつて薬種商を営んでいた。ここに吊られていた看板も保管されている。



大和棟の住宅



帯解より約1km、高井病院が左手の遠方に見える。「(株)サンリース関西」の看板の手前に流れる水路が、奈良市と天理市との市境である。ここより天理市蔵之庄町に入る。

高井病院横の交差点を渡ると、左側にも民家が並び始める。さらに約300m先の右手に、杉玉（酒林）の吊られている酒屋（喜多商店）がある。この周辺も昔ながらの景観を数多く残している。

さらに約100m進むと蔵之庄大橋（菩提仙川）を渡り、両側に大和棟が並ぶ集落となる。大和棟は屋根型に特徴のある家屋で、奈良盆地とその周辺、特に稗田環濠集落から天理・三輪にかけて稠密に分布する。傾斜のある草葺屋根（現在はトタンをかぶせているものが多い）の両側の妻を壁土や白漆喰で塗り堅め、その上を細く本瓦葺きしたもので、この部分を高扉とよび、先に獅子や鳩、あるいは七福神の鬼瓦を置く。妻の隣には傾斜のゆるい瓦葺きの釜屋（台所）が続き、一個の家屋を形成している。

## 楢町から櫛本へ

蔵之庄町を離れて約500m進み、楢川橋（楢川）を渡ると楢町の集落に入る。さらに約100m先左側には楢神社がある。子育ての神として有名で、楢の一字をもらって名付けるといふ信仰がある。境内に参宮常夜燈が1基建っている。

楢町と隣接して櫛本町がある。楢神社より約100m進むと、「左不動山大師道」と彫られた昭和10年(1935)5月の道標と、指型を大きく浮き彫りにし「和珣坂下傳稱地道」と彫られた昭和15年(1940)11月の道標が立っている。ここから東に向かうと和爾の地であり、その記念碑や式内社和爾坐赤坂比古神社が建っている。

上街道はさらに南へ進む。約100m先の千檀菓子店の植え込みの中に「山ノ辺ノ道、左たつた」と刻まれた自然石の道標がある。店主が趣味で作って建てたものらしい(伏籠・伊勢・瀬の和 楢神子)。

---

沿道のまち② 天理市（奈良県） 人口 68,627 所帯数 26,185 面積 86.37km<sup>2</sup>

〔沿革〕 中心地の丹波市は明治22年山辺村、同26年丹波市町。昭和29年周辺町村と合併し天理市に。

〔概況〕 市域西部は奈良盆地、東部は大和高原。西部地域は県内最大の古墳地帯で、古代から中心地として栄えた。現在は「山の辺の道」を中心とする観光都市、天理教を中心とする宗教都市の両面がある。

〔街道〕 市域西部を上街道、中街道の2本が南北に通り、西部と東部を貫いて、高瀬街道など山間部と盆地を連絡する道が走る。伊賀方面への短絡路は古代からこのルートを抜けていた。宝来講では、北から市域に入り、櫛本、丹波市、柳本と大集落を串刺しにしてまっすぐ南下、南の桜井市へ抜ける。

さらに約200m行くと、丁字路二つを鍵の手状に進む変則四叉路に出る。まず正面に古風な消防器具庫が見え、ここで東西方向の道と丁字路になっているが、少し西側に食い違って高瀬川に橋が架かっており、また南へ向いて進んでいくわけである。どちらの丁字路も大きく隅切りがしてあるので、道としての連続性は一見してもわかる。

この東西方向の道は、都祁と竜田を結ぶ高瀬街道で、ここは両者の交点として交通の要衝となっていた。ひとつ目の丁字路右側手前、隅切りの途中には享保12年(1728)8月吉日銘の道標があり、この四辻の重要性を示している。ただ、現在の道標についていえば、南面の「右なら 左たつたみち」は問題ないものの、西面は「右ほうりうじ 左はせみち」を示しており、左右の関係が全く逆になっている。おそらくどこからか移動してきたのであろう。

#### 道標を推理する

寛政3年(1791)刊の『大和名所図会』を見ると、道路を隔てた高瀬川のほとりに道標らしいものが描かれている。これをこの道標と考えると、西面の指示地名は符合するが、今度は南面が合わない。この南面の字の書体は西面と若干異なっているので、南面の文字は移動の際に刻まれたと考えてみる。少々苦しい解釈だが、石造道標への追刻はかなりの例があるので、可能性としては全くないわけでもない。

さらに大胆に推理すれば、この面には別の文字が刻まれていたとも考えられる。断面を見ると、南面だけが薄くなっているのである。頂部の造作もこの面だけ様子が異なるので、もともとはもう若干厚みを持っていたと思わせなくもない。



少し寄り道をして、高瀬街道をここより東へ少し行くと、和爾下神社がある。『大和名所図会』を見ると、この辻から神社に向かう道には鳥居が建てられており、高札場のようなものも見える。現在は、高瀬街道と国道169号線(天理街道)の交差点がこれに近い姿になっている。鳥居前には、上街道の辻に建っていたと考えられる道標が保存されている。

上街道へ戻り、高瀬川を渡ると、古い民家が何軒か残っている。右手に文政3年(1820)銘の愛宕山常夜灯があり、左手には天理警察署標本分署跡参考館がある。天理教教祖・中山みきが一時投獄された所で、明治期の建物が保存されている。

## 在原神社 (在原寺)

上街道はさらに南に進み、西名阪自動車道の高架下をくぐる。そして約100m先の西川靴店を左へ入ると在原神社がある。第2回(1987)以来、天気の良い時はここで昼食をとっている。在原神社は元は在原寺といい平安期に創建されたが、明治9年(1876)に廃仏毀釈により神社となったものである。

『大和名所図会』には在原寺として本堂や寺門などを描いており、にぎわいのあったことを窺わせるが、現在その面影は全くない。本堂は大和郡山市若槻町の西融寺に移建されており、この地にはわずかに小さな祠堂と案内板がその存在を示すのみである。西名阪道のすぐ足もと、天理インターの至近であるが、どことなくのどかな空間である。

境内の入口には「在原寺」と刻まれた石標が立っている。この石標の裏面には「在原神社」と刻まれているが、おそらく明治以降に追刻されたものであろう。同じく入口には愛宕山常夜灯が立っている。また、この在原寺は謡曲『井筒』の舞台となっており、境内には曲にゆかりの井戸が残されている。他にはめおと竹、芭蕉句碑や「下馬」碑などがある。下馬碑の側面には「天平元年」の銘があるが、真偽は定かでない。

## 天理市中心街

昼食を終え、上街道に戻る。約200m先で小川を渡るが、そのほとりに安政7年(1860)銘の道標が立っている。「正一位平尾姫丸稲荷大明神」「従是東五丁」とあり、ここより東にある姫丸神社への道を示している。正一位を賜っていることから、昔は栄えていたであろうが、現在では小さな祠堂があるのみであり、さびれている。姫丸神社への道標は約200m先にもう一つ、安政7年(1860)銘の小さなものがある。

古い町並を歩いていくと、2本目の姫丸神社道標から約150m先の右手に浄土院がある。庫裡の裏庭には、近くの道路脇の土中から発見された道標が保管されている。上街道に立っていたと思われるが、原位置は未詳である。浄土院から100mほど進むと、右側に明治32年(1899)銘の常夜灯があり、上街道はここで斜め左に折れる。100mほどの間は、左側に小さな大師堂や背の高い檜と楠、右側に古い家屋が並び、少しばかり現代ばなれした景観である。右側には蔵を改造したモータープールがあるが、これは酒蔵として使用されていたもの。この元酒蔵を所有する大塚酒店は天明年間の創業で、昭和52年(1977)まで自家銘柄を醸造していたが、現在は生産を中止している。

大塚酒店を過ぎるとすぐ左側に「従是東 笠山荒神へ二里 左なら」「右はせ」と刻まれた道標がある。笠山荒神は桜井市笠にあり、かまどの神として知られる。ちなみに長谷寺門前にも笠山荒神を示す道標がある。

上街道はこの道標に従い右折する。このあたりから天理教会詰所や母家の高い建物が随所にみられるようになり、天理教の法被を着た信者も多く、宗教都市天理のイメージを彷彿とさせる。

天理市は昭和29年(1954)4月、丹波市・二階堂・朝和・柳本・福住・樺本の6町村が合併し、日本で最初に宗教団体名をとって名付けられた。市内は天理教一色と言っても過言ではなく、独特の雰囲気がある。

笠山荒神道標より約300m先の甲賀詰所の前で斜め左に曲がる。浦西商店の角を右折、少々雑然とした感じのする町を500mほど進む。中央分離帯のある広い道を渡るが、これが天理中大路、さらに100m先で天理本通商店街と交差する。いずれも右にとれば天理駅前に達する。本通商店街は、旧天理駅前から天理教会本部へと続いており、アーケードが上街道を乗り越している様は、ふたつの道の力関係(?)を見る思いもする。

これを過ぎると、上街道沿いにはまた古い町並の商店街が続く。このあたりが川原城町で、街道から東へ少し入った川原城会館の旧館には、上街道にあったと思われる道標が3基集められている。上街道は丁字路に突き当たって左折、すぐ宮西商店の角を右折しクランク状に進む。約100m先の旅館富士の南隣には常夜灯が立っている。

丹波市  
木造アーケードが残る市跡と風格ある町並



## 丹波市

国道25号線を横切り、丹波市町<sup>たんばいち</sup>に入る。約100m進むと橋があり、60mほどおいてもう一つある。一つ目は布留川北流（北布留川）、二つ目<sup>ふりゅう</sup>がその本流の布留川である。布留とは石上神宮<sup>いそののみや</sup>のことであり、布留川は石上神宮の北の谷間より流れてきている。

二つ目の橋を渡るとすぐ左手に宮崎酒造<sup>みやざきしゅぞう</sup>があり、「天理の里」「杜氏の魂」「白堤」を製造している。この周辺も旧街道の古い町並が続く。ゆるい左カーブにそって行くと、道は右に折れてまた真南に向き直る。この付近にはなぜかこうした形状の道が多く、これで3か所目である。しかしこの家並は少々特異で、この右折点から数十mで不意に大きく開けている。道とも広場ともいいがたい景観だが、これが南へ200mほど続いており、一部だけ残されたようなアーケード状の木造屋根が目に入る。ここが丹波市の市跡である。元来天理地域はこの丹波市が中心であったが、国鉄桜井線天理駅（市制施行時に丹波市駅から改称）が、昭和40年（1965）北方に移され、国鉄・近鉄天理総合駅としてターミナルが形成されてからは衰退の一途をたどっている。

近世の丹波市は宿場としても機能しており、距離的にも上街道の中間地点という利を得て栄えた。道の右手に続く豪壮な民家が、当時の繁栄ぶりをしのばせる。なかでも木造屋根の西側にある辻家は、塗籠の高二階に入母屋の屋根を載せ、一見今井町<sup>いまい</sup>（橿原市<sup>かしはら</sup>）の民家を思わせるような造りである。

古い木造屋根が残っているのは、紙類を取り扱う堀商店の前で、荷下ろしなどに便利のためそのまま残しているそうである。また、屋根は広い道の東側半分だけにあり、西側の柱は道路中央に並んでいて、少々不自然な印象を受ける。もともと、この道の中央には川が流れており、馬の飲み水、鮮魚の洗い水などに使用されていた。この川をはさんで東西両側にあった道のうち、東側の道だけに屋根がかかっていたが、川が暗渠になり、東西の道が広い一本の道になったため現在のような景観になった。

堀商店<sup>（いちにいいます）</sup>の南には市座神社<sup>いちざ</sup>がある。祭神は事代主命<sup>ことしろぬし</sup>で、丹波市の市の神として信仰を集めてきた。境内には「天保元年太神宮」「文化八年藤堂家御武運長久願主油屋長蔵」「文化四年扇屋彦四郎」と刻



まれた常夜灯や、丹波市町道路元標が残されている。

## 三味田

丹波市をあとにして上街道を歩く。家並が切れると、右側には再びJR桜井線が並行してくる。市営ガス製造所の前を過ぎると、そのすぐ南側で布留川支流の<sup>まがた</sup>勾田川を渡る。小さな橋には、石仏が欄干のように並べられている。約300m行くと、右手の線路を隔てた池のほとりに「史跡岡田為恭遺難之地」と刻まれた石碑が立っている。<sup>岡田為恭</sup>岡田為恭(1823~64)は<sup>冷泉為恭</sup>冷泉為恭とも号し、幕末に活躍した画家であるが、尊攘派に幕府側謀者であるとされ、天誅の対象となり、元治元年(1864)にここで暗殺された。

のどかな田園風景をぬけて<sup>さんまいでん</sup>三味田町に入る。周囲に家屋などが少ないので、道の左側に続く山並みを見渡すことができる。正面近くに見える容姿端麗な山が<sup>さんりん</sup>三輪山である。

町の入口には八坂権現の社殿がある。文久3年(1863)9月25日、この社の裏手で岡見留次郎ら天誅組の志士5人が藤堂藩士によって捕らえられている。

さらに上街道を進むと、突き当たりに藤棚があり、その下に芭蕉の句碑が立っている。句碑には「<sup>草臥</sup>草臥れて <sup>宿</sup>宿かる <sup>比</sup>比や <sup>藤</sup>藤の花 はせを」と刻まれている。貞享5年(1688)、伊賀の俳人松尾芭蕉は<sup>琴引峠</sup>琴引峠(宇陀郡室生村)を越えて大和に入り、初瀬・吉野・高野・和歌浦などを吟行したあと、再び大和を経て<sup>明石</sup>明石へ向かった。この旅の途上、丹波市周辺では<sup>石上</sup>石上(天理市布留町)や<sup>桃尾滝</sup>桃尾滝(同滝本町)を訪ね<sup>耳成山</sup>耳成山の東、八木というところに宿泊している。この「八木」は<sup>八木町</sup>八木町(橿原市)ではなく、<sup>夜都岐神社</sup>夜都岐神社(天理市乙木町)付近のことではないかといわれている。この句はその時に詠まれ、彼の著作『笈の小文』に収録されている。一方、句碑は文化11年(1814)春、<sup>芝</sup>芝(桜井市)の人、「風来庵雪酔」によって建立されたものである。こういった近世の句碑は旧街道を示す目印として重要である。

上街道はこの句碑前で大きく左へ曲がって東を向き、わずかの間ながら<sup>つげ</sup>都祁の山々を正面に見て歩く。

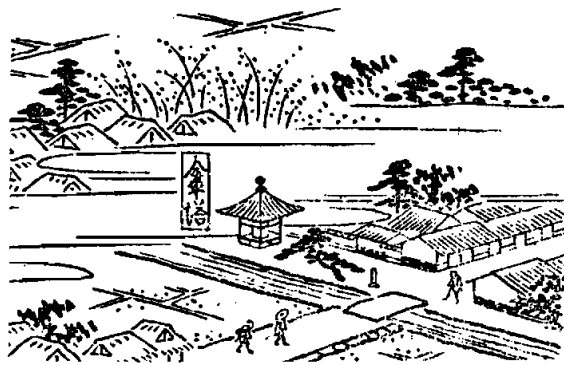
## 大和神社

句碑から約300mで国道と交差、<sup>さほのしょう</sup>佐保庄の集落に入ったところで、家並に沿って右折し、再び南を向く。ここで古代の上ツ道と重なっている。約200m進むと左手に<sup>おか</sup>岡地蔵がある。地蔵の光背には永禄元年(1558)の銘がある。そして、斜めに走っている国道と再び交差、約400m行くと、右手に<sup>おやまと</sup>大和神社の参道があらわれる。ここで例年小休止をとっている。大和神社は大和国<sup>山辺郡</sup>山辺郡の筆頭に挙げられる名神大社で、13,000坪の広大な境内に祀られている。祭神は<sup>おおくにたま</sup>大国魂大神・<sup>やちほこ</sup>八千戈大神・<sup>みよし</sup>御年大神となっている。『大和名所図会』にもその記載がある。

また、この周辺には大小の多数の古墳が集まっており、大和古墳群と呼ばれている。大和神社の手前に池を挟んで<sup>ほくらやま</sup>馬口山古墳があり、さらに神社より約300m進むと、柿の木が生い茂り、一見果樹園に見える小山があるが、これも古墳である。案内板には<sup>やちほこ</sup>矢矧塚古墳と記してある。このような古墳が上街道の周辺に多数見受けられる。

## 柳本

矢矧塚古墳より、周りは再び田園風景となる。約300m先に丁字路があり、この右側の  
大樹の下には石仏が山と並んでいる。ここより柳本の集落に入る。丁字路を直進すると、  
すぐ先の左側に大和棟の民家（村井家）がある。草葺だった部分がトタンの波板に変わっているほかは原型に近く、高塀の特徴がはっきりとわかる。1日目の道中では数少ない、ほぼ原型の大和棟家屋である。



約200m行くと、長岳寺参道の入り口に奇妙な建物がある。これは長岳寺の境外堂、五智堂で鎌倉期の建築物。国の重要文化財である。どこから見ても正面に見えるため真面堂ともいわれ、また、中心の一本の太い柱で堂を支え、四方を柱で補う構造から、傘堂とも呼ばれている。江戸期には床が張られて、旅人の休憩所にもなっていたらしい。『大和名所図会』にも傘塔として描かれている。

堂の前には、天理市内でもっとも古い元禄7年(1694)銘の道標が建っており、「釜口山長岳寺従是東五町」と刻まれている。『大和名所図会』にも道標が描かれており、五智堂もこの位置にあることから、上街道を通る旅人に長岳寺参道を案内するため建てられたと考えられる。また天保8年(1837)銘の常夜燈も建っている。

五智堂の30m先左側に、ぱったり床几と駒繫ぎのある近山家があり、往時の名残をとどめている。さらに進むと、郵便局や銀行、商店などが立ち並ぶ柳本の中心部に入っていく。商店街風の家並のなかにも、勝井酒造など、古い造りの家が散見される。

JR柳本駅から東へ上ってくる駅前通りとの十字路には、柳本村道路元標が立っている。この十字路から駅前通りを約100m東に入ると黒谷古墳がある。その南側に柳本小学校があり、江戸期にはこのあたりに柳本藩の陣屋があった。柳本藩は、織田信長の弟長益の五男、尚長が一万石を与えられて代々世襲し、明治維新に至った。明治2年(1869)には城下の家数が1454軒、人口も6814人を数えた。藩邸は昭和42年(1967)まで校舎として使用されていたが、現在は橿原神宮の文華館となっている。

町並の南端には伊奈岐神社参道入口があり、これを過ぎると再び田園風景となる。左手には崇神・景行天皇陵、その背後に竜王山、左手前方に美しい曲線を描く三輪山、また右手前方には耳成山・畝傍山が重なり、そして天の香具山、遠方に二上山及び葛城・金剛山などを一望に見渡すことができる。上街道を行く中ではかなり美しい景色である。

家並が途切れると、右側には石名塚古墳と新池があり、さらに進むと纏向の集落に入る。この集落北端付近が天理と桜井の市境である。

---

沿道のまち③ 桜井市（奈良県） 人口 63,150 所帯数 19,432 面積 98.97㎢

【沿革】明治22年に成立した12か村を基礎に合併を重ね、昭和31年市制。市域確定は昭和44年。

【概況】北東部は奈良盆地に属するが、東部は初瀬谷、南部は多武峯などの山地。その地形から交通の要衝となり、古代には宮都もあった。東端に長谷寺がある。西部は商業地・木材集散地としても有名。

【街道】奈良盆地南部を東西に貫く横大路（初瀬街道・伊勢街道）と、奈良からの上街道が市域中央の慈恩寺追分で合流、これとは別に三輪から桜井へ直行する道、また宇陀・吉野方面への道などが交錯する。宝来講では北隣の天理市から当市域に入り、三輪・慈恩寺・初瀬を経て東の榛原へ抜ける。

## 纏向

纏向の町並には、柳本などのような古い民家がありません。比較的新しい家屋が並ぶなかを進んでいく。道の右手、<sup>ひょうず</sup>兵主神社鳥居の前に纏向村道路元標がある。さらに約200m先の島岡駅前酒店を右に入ると、JR桜井線<sup>まきむく</sup>巻向駅がある。無人駅という気易さもあり、例年ここで休憩をとっている。このあたり一帯は纏向遺跡と呼ばれ、弥生期から古墳時代前期までの大集落遺跡で、現在も発掘調査が続いている。また、酒屋前の桜井農協纏向支所には<sup>かきのもとのひたまり</sup>柿本人麩屋敷跡の石標が立っている。地域全体が古代遺跡として重要であることを感じさせられる。

再び街道に戻って進むと、酒屋より約200mで県道の陸橋下に出る。もともとの道は、線路を渡って南側へまっすぐ伸びていたはずであるが、現在は踏切がない。一度陸橋の東南側へ抜け、陸橋沿いに天理方面へ戻ってから陸橋に併設の歩道を渡る。JR桜井線の線路を越えてすぐ、階段を左へ降りれば、下を通っている道が上街道である。

陸橋からは左手に小高い丘が見えるが、これが<sup>はしほか</sup>箸墓古墳である。全長280m、後円部径160m、前方部幅140m。日本最古の前方後円墳とされ、被葬者は<sup>ひもと</sup>倭迹迹日百襲姫といわれている。

街道は古墳の横を通り、芝村へ抜ける。

## 芝村

箸墓古墳より約200m進み、巻向川を渡る。川の南岸には、天保14年(1843)銘がある自然石の太神宮常夜灯とともに、ヨノミ(榎実、大和方言で「榎」の意)の大木が立っていた。子供達がターザンごっこをしていた光景が目に浮かんでくるのだが、第6回(1991)の時には切られていた。土地の人の話によると、平成2年(1990)、台風のために木が傾いてしまい、放置すると危険なため、自治会の承認を得て切り倒したとのことである。切り株の年輪は97まで確認できた。樹齢約100年である。

巻向川より<sup>しげ</sup>芝の集落に入る。江戸期、この付近一帯は織田家・<sup>しげのう</sup>芝村藩領であった。河藩領は織田長益の四男長政が、はじめここより約2km南の戒



### 箸墓伝説

『日本書紀』によると、被葬者とされる倭迹迹日百襲姫は第10代崇神天皇の妹であり、聡明でよく物事を予知した。武埴安彦(第8代孝元天皇の皇子)の謀反の発覚も彼女の予知による。その後大物主神の妻となったが、大物主神は実は小蛇であり、その姿を見て姫は驚いて叫んだ。大神は、自分に恥をかかせたとして、今度は姫に恥をかかせようと御諸山(三輪山)に登った。姫は仰ぎみて悔い、座りこんだ。そのとき箸で陰部を撞いて死んでしまったので大市に葬った。その墓を名付けて箸墓という。この墓は昼は人が造り、夜は神が造った。石は大坂山(二上山)より墓まで人民が連なって手渡しにして運んだと書かれている。

巻向川 今はなきヨノミの大木(第2回)

じゅう  
重に陣屋を置いて戒重藩として支配したが、延享2年(1745)、上街道に面するこの地に移った。明治3年(1870)の城下の家数は1385軒、人口6744人とされている。

町並の中を行くと、道路元標のある十字路に出る。「織田村道路元標」と刻まれている。織田村は明治22年(1889)に芝村・茅原村・箸中村・大泉村・大西村が合併して成立したが、現在は自治体名・大字名としては残されていない。この道路元標は第4回(1989)で発見した。この四辻より東へ200m入った織田小学校の校庭にあったものを、昭和64年(1989)1月7日に元の位置に戻したということである(「瀬戸を軸に」)。

この十字路から先に続く町並が、旧芝村中心街である。城下であったためか、現在でも規模の大きな古い民家が目につく。十字路すぐ先右側の中谷家をはじめ、中西米穀店、福西家、垂水家など、奈良町などの民家とは少し趣の異なる建築が目を引く。

### 三輪

さらに進み、大三輪中学校の約100m先で、井上ふとん店前のY字路を左へ進む。約400m進み広い道を横切る。大神神社新参道(県道三輪山線)である。右側には新参道と国道169号線の交差点に立つ大鳥居が見える。昭和61年(1986)の建立で、高さ33m、柱間23m、柱の直径は3mある。

大神神社は別名三輪明神ともいい、わが国最古の神社とされる。祭神は大物主命であるが、三輪山そのものが御神体で、山を拝む古代信仰の姿を今に伝えている。本殿はなく、拝殿の奥に鳥居を3つ組み合わせた独特の三ツ鳥居があるだけである。大物主命は箸墓の被葬者とされる倭迹迹日百襲姫の夫である。

参道を横切るとすぐ、突き当たりになっており、道は左へ曲がる。すぐ左側に現れる参道と鳥居は大神教本院である。明治15年(1882)、社教分離令によって大神神社での宗教活動が禁止されたため、宗教活動を担当する祈禱所として分離した。分離令解除後は再統合し、大神神社の「下の宮」「祈禱所」などと呼ばれている。この鳥居が本来の一の鳥居になるが、現在のものは復元である。

古い町並は徐々に右へカーブしながら続いている。本院の参道からすぐ、道の左側に総本瓦葺きの家(柴田家)があり、これを少し行き過ぎて振り返ると、この家の棟の上に大鳥居が見える。

すぐに一灯式の点滅信号がある変則四叉路に出る。交差しているのは三輪駅前通り(県道三輪停車場線)で、左にとって街灯の並ぶまっすぐな県道を行けば、JR桜井線三輪駅に出る。

上街道は県道を横切り、なおもゆるい右カーブを描いて、古い町の中を進む。両側の商店も、かなりの風格を持つものが多い。駅前通りから100mほど行くと、正面に元治元年(1864)銘の道標があらわれる。「右なら京みち」「左はせいせたふのミネよしの大みね山上」と彫られている。歩いていて目的地「いせ」の文字を見つけたとき、何かほっとするものがある。道標に従い左折する。すぐ右手に池田屋という素麺屋があり、軒の上に凝った看板を上げている。

三輪素麺は千年以上の歴史を持つといわれ、江戸期には巻向川の谷に多くの水車がかけていた。この水車動力を利用して粉を引き、厳寒期に手延べて生産されてきた。この周辺には今も素麺工場や、商店が多数並んでいる。

もともと三輪は門前町であったが、中世以降市場町として発達してきた。江戸期には、上街道の往

来が頻繁になるに伴って人馬の継立を要求され、宿駅ではないがこれに準ずるものとして認められた。茶屋も多く、近松門左衛門の戯曲『恋飛脚大和往来』に登場する梅川・忠兵衛の道行では「奈良の旅籠屋、三輪の茶屋」とうたわれている。

池田屋より約50m先左側に三輪坐恵美須神社があり、この前に三輪町の道路元標が立っている。恵比須は市神とされており、江戸期三輪の市はこの恵美須神社を中心に開かれていた。境内には天保12年(1841)銘の太神宮常夜灯や、上街道から移されたと思われる道標2基が存在する。慶応2年(1866)銘の「右なら道 左信貴山毘沙門天王道」と刻まれた道標は、もと馬場先(大神神社参道と上街道の分岐点)に立っていたといわれ、また「右よしの 左はせみち」とある自然石の道標は、三輪の南出口(上市)・桜井と初瀬との分岐点にあったものとされる。

上街道は、恵比須神社前を右折し、出口橋の手前を左折、JR桜井線を越えて金屋へと至る。しかし宝来講では第1回(1986)から第7回(1992)まで、いったん山の辺の道へ入り、金屋へ出る道を通っていた。このルートは、おもに大神神社～初瀬間の近道として利用されていたようである。

### 山の辺の道 — 宝来講 旧コース —

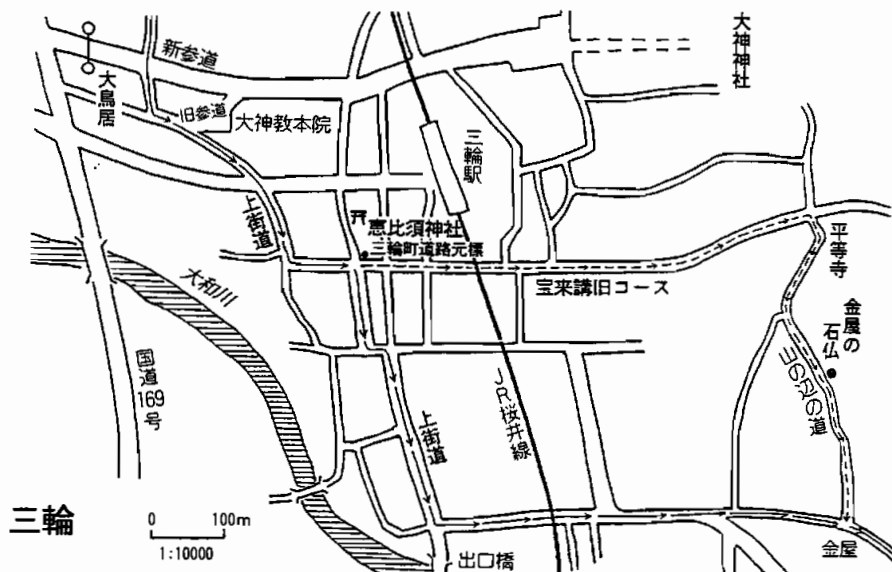
恵比須神社前を直進し、趣のある三輪の町並を抜ける。JR桜井線の踏切を渡ると、上り坂になる。踏切の約100m先に山の辺の道の標識があり、ここから金屋までは山の辺の道を行く。宝来講の時期には、右手の梅園に満開の梅が美しい。振り返れば、大和三山が遠望できる。

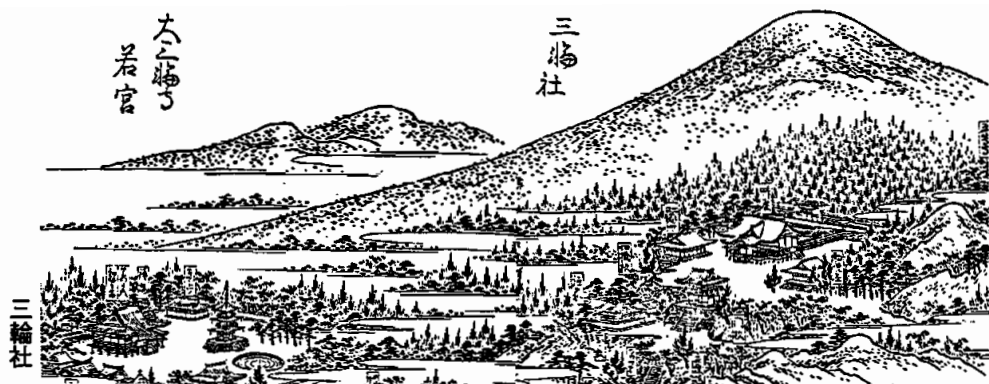
坂を上ると平等寺に至る。寺の前には「はつせ いせみち」と彫られた道標が、どっしりと腰を据えている。道標には一部に修正の跡があり、移動しているようである。

平等寺の草創は明らかではないが、大神神社の神宮寺という大寺であり、鎌倉期に慶円上人が中興した。真言宗の寺で、文禄検地では80石の寺領があった。明治維新の神仏分離によって廃寺となったが、明治10年(1877)、当地に翠松庵が開かれ、旧平等寺の十一面観音(平安期)が移された。その後翠松寺と改め、昭和52年(1977)には平等寺と改称した。

街道は道標の前を右折し、寺に入らず右横の細い道を下っていく。山蔭の道のこととて、夕方にはかなり薄暗くなる。ポーッとしていると見落としてしまうような道標が左側に一基ある。

東海自然歩道の標識を過ぎ、約100m進むと、鉄格子の堂に納められた金屋の石仏がある。約2.2mの凝灰岩に釈迦如来と弥勒仏を浮き彫りにしている。鎌倉期以前の物として知られている。さらに進むと金屋の集落に入り、道標のある丁字路に出る。ここで上街道に合流である。





「大和名所図会」

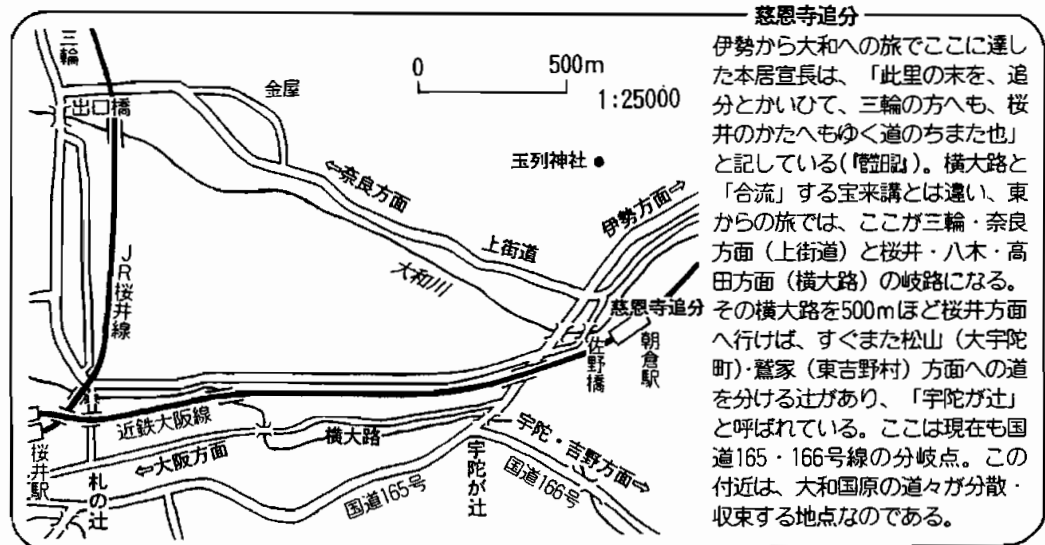
### 三輪から金屋へ

恵比須神社前で南へ折れた上街道は、落ち着いた家並のなかを行く。角から2軒目右側は「みむろ最中」の本店・白玉屋である。軒には金看板が上がり、屋根も堂々たる本瓦である。一軒おいて心念寺の参道があり、さらに一軒おいて酒林の吊られている今西酒造、不動産の中平商事と2軒続いて本瓦の商家が並ぶ。酒屋はともかく、本瓦葺の不動産屋とは珍しい。道はこの2軒ほど先で丁字路になっている。左の角が大きく隅切りしてあり、一見して左が街道とわかるが、左折するとすぐ、今度は右角を隅切りした十字路があり、これを右折して再び南へ向く。三輪の南の玄関、出口橋まではあと200mほどである。この部分には先ほどまでのような豪壮な建築は見られないが、それでも春日神社を過ぎたあたりの左側に、古い町家が3軒ほど並んでいる。

やがて道はゆるい上りになって初瀬川の堤防に出る。出口橋の北詰左側には、天保10年(1839)銘の「太神宮」常夜燈が立っている。直進して橋を渡れば桜井へと続くが、橋を渡らず、この手前の丁字路から左に折れるのが、金屋へ向かう上街道である。200mほどでJR桜井線の踏切を渡り、さらに300mほど行くと新道が斜め右へ分かれていく。ここを直進した旧道は家並の中へと入り、約200m先の丁字路で平等寺からの道と合流する。丁字路の左側角には「三輪大明神ちか道」の道標が立つ。以前は木製の灯籠が立ち、背後にある家も古びたものであったが、灯籠がなくなり、家が建て替えら



金屋の道標 (第1回当時)  
慈恩寺追分にあった道標 (玉列神社に移転)



れ、気がつくと全く違う場所のようになってしまっている。上街道に合流して、約200m行くと「海石榴市観音道」の道標があり、海石榴市の案内板も立っている。街道を外れてここより左に入れば、すぐに海石榴市観音を案内する自然石の道標があり、さらに進むと小さな観音堂がある。堂内には元龜2年(1571)と元龜3年の銘のある十一面観音の石仏が二体祀られている。

海石榴市は古代より初瀬川・山の辺の道・横大路の交差する水陸交通の要衝として栄えた。日本で最も古い市場といわれる。またここでは歌垣も開かれたとされる。歌垣とは、春秋の2回定められた場所に男女が集まって、恋歌を詠みあって婚約した、いわば集団見合いの場であった。

## 慈恩寺・朝倉

街道を約100m進むと県道と交差する。渡った先の左側に天保12年(1841)銘の道標が建っている。「左はせいせ道」と彫られているが、県道新設のとき、道標もこれに合わせて移転したものである。ここでは曲がらず初瀬川の堤防で左折する。初瀬川の堤防を100mほど歩き、県道に合流する。約300m先左手に大三輪病院跡の広い空地がある。この付近の旧街道は、地形から見て現在の病院跡地を通過していたものと思われる。さらに県道を進む。左手には山が迫り、右には家が並んだり、田が広がったりである。やがて左側の山が離れ、道は広い谷の中央に出てくる。左手やや後方には三輪山、右手には鳥見山、その手前を近鉄大阪線が築堤で横切っていく。さらにその手前には、近鉄の下をくぐってきた国道165号線の車の流れも見えてくる。

小さなカーブをいくつか過ぎると、正面に国道165号線の慈恩寺北交差点が見えてくる。これを横断して集落内に入ると、すぐ三叉路がある。ここが慈恩寺の追分と呼ばれた場所である。かつては道標があったが、現在は約500m北の玉列神社参道入口横の阿弥陀堂境内に移されており、「追分」を示すようなものは何も見られない。右から合流してくる道は横大路。高田・八木・桜井からの道である。上街道の旅はここまで。ここから横大路の東の延長部である初瀬街道に入る。

初瀬街道は、ここからしばらく国道165号線と並行する。両側には古い町並が続く。奈良町、丹波市、芝など、これまでにも古い民家の残るところはあったが、町並として連続した景観になっている

ところは少なかった。この慈恩寺の町並は街道風の民家が連続して残る部分が多く、往時の名残をとどめている。宝来講の時期だと、このあたりで日没が迫ってくる。天候がよければ、真後ろから夕陽に照らされる。振り返ると、古い町並がシルエットになって、美しい。

慈恩寺追分から約500m進むと、道の両側に天保2年(1831)銘の常夜灯がある。右手の家並が途切れると、近鉄大阪線の線路が間近に見える。

国道から朝倉台へ的高架橋をくぐり、すぐ築紫原橋を渡って、また古い町並の中を歩くと、左側に朝倉村の道路元標がある。道路元標は通常町の中心部か、もしくは重要な箇所<sup>あきくら</sup>に建てられるが、この集落は約100m先で途切れるので、はずれた位置に建てられた特異な道路元標である。このあたりは黒崎と呼ばれ、江戸期には名物の饅頭もあり、『菅笠日記』にも次のような記述がある。

出雲村黒崎村などいふ所をすぐ。此あたりは朝倉宮列木宮などの跡と聞こしかばいとゆかし。此くろざきに家ごとにまんちうといふ物をつくりてうるなれば、このふりにし宮どもの事たづねがてら、あるじの年おいたるがみゆる家見つけてくひに立ちよる。

街道は約100m先のはるさめ工場前で国道と合流する。工場の敷地には、はるさめなどを干す光景が見られる。

## 出雲

国道をひたすら歩く。ここまでの街道は、現在の主要道と並行した形で独立しており、自動車の交通量も少ないものであったが、久々に国道をまともに歩くと、何かとまどうものがある。この付近の国道は、大正元年(1912)から昭和13年(1938)まで、桜井～初瀬間を営業していた初瀬軽便鉄道(のちに大阪電気軌道に合併されて同社初瀬線)の廃線跡である。曲線・勾配ともにゆるやかだから、国道転用にはお詠え向きであったのだろう。旧街道と廃線跡が合流するのは不自然に思えるが、この付近は街道と軌道敷が並んで通っていたため、道路拡幅の結果、現在のような景観になった。

約400m歩くと左手に流地蔵がある。その先約100mの西浦造園前で国道を離れ、左の旧道に入る。ここが出雲の集落である。伊勢参りの土産の一つとされる出雲人形で名高い地でもある。

しばらく出雲の集落を歩くと、十二柱神社が左手にある。十二柱神社は祭神が国常立命など天神5

### 出雲人形

泥人形・土人形ともいわれる。型に入れた粘土を田で焼き、泥絵具で彩色した素朴なものだが、独特の風合いを持ち、「左前人形」「相撲」「長崎唐人」など種類も豊富である。

垂仁天皇の皇后日葉酢姫命が亡くなった際、出雲国より土部を呼び寄せ土で人形を造り、殉死の代用としたことが埴輪の起源であるといわれる。その功により、野見宿禰が鍛地(かたしところ、陶器を成熟させる地)を賜り、出雲国の土部とともに移り住んだといわれるのがこの地とされる。出雲の地名の由来である。出雲人形のうち、左前人形は男性器の形に絵をかけたものとされ、元々は祭祀的なものと考えられることから、埴輪と同一の起源といえなくもない。ただ、現在製作に使われている型は京都の伏見人形からの転用と思われ、製作・販売開始の時期も文化・文政の頃という。

現在では製作者も少なくなり、水野佳珠さんただ一人がその技術を伝えている。





代、地神7代の十二柱である。境内には明治16年(1883)に移された伝野見宿禰五輪塔があり、入り口には天保2年(1831)の太神宮常夜灯がある。神社には享保から文久にいたる10枚の棟札があり、天正5年(1577)9月吉日と記された古文書(写)から、古くより頭仲間といった宮座があったらしいことがわかる。

十二柱神社より約200m進むと国道と交差する。左手の歩道橋には「桜井市出雲」とある。桜井東中学校を右手に見ながら約200m旧道を歩き、再び国道に出る。この先も、国道の北側に旧道が続いていたようであるが、初瀬小学校の建設時に消滅したらしく、今は確認することができない。国道に合流して白河川<sup>しらが</sup>を渡る。この先、長谷寺参道口までの約600mは、国道歩きになる。

## 長谷寺門前

橋を自動車がどンドン抜いて行くたびに何か空しさを感じ、自動車なら楽なのにとつい考えてしまう。夕暮れ時というのも、心理的な影響があるだろう。人によっては腹も空く時間。国道沿いとあって飲食店も多いが、立ち寄るわけにもいかない。初日。まだ元気は余っている筈でも、この頃になると皆なぜか口数が少なくなってくる。列もかなり長くばらける。ここまで来たら、列を整えることを考える必要はなく、むしろ早いものから宿にあがったほうが、それぞれのために良い。

初瀬観光センター付近で、道の左側が大きく広がっているが、これが初瀬軽便鉄道の初瀬駅跡である。消滅した旧道も、この付近で国道に合流していたと思われる。これを過ぎ、「長谷寺」の石標や燈籠が見えてくると、国道は右へカーブし、西峠への登りにかかる。旧道は国道から左へ分かれ、2基の燈籠の間を抜けて長谷寺門前の商店街の中へ入る。近世には門前町入口に当たるこの付近に鳥居が建っていた(伏魔殿など)。明治41年(1908)の大風によって倒壊したというが(畷紳史)、その北側の礎石が、国道と旧道の分岐点左側路傍、駐車場の入口付近に残っている。しかし、南側の礎石は分岐点の中央付近にあり、その痕跡は舗装の下となって確認できない。

本日の行程もあと約1kmである。ここまで来ると極度に疲れが出て、1kmでも長く感じる。商店街入口から200mで丁字路があり、右に分かれる道があるが、これが現在の長谷寺駅口になる。

足が重いがふんばって歩く。土産物屋・食堂・旅館などの並ぶ商店街を約700m行くと丁字路があ



鳥 叡  
居 瀬

り、右側のくさ餅屋（さかえや）の角に道標が立っている。道をはさんでさかえやの向かい側には、初瀬町道路元標もある。ここは伊勢辻と呼ばれ、伊勢への街道は右に折れ化粧坂を上る。本日の旅籠・吉野館は、この辻を直進して200mほど行ったところにあるため、もう少し歩かねばならない。

町並がさらに古くなってくると道も狭くなる。交互通行用の信号も設置されているが、近年は使用されていないようだ。参道は左にカーブを描きながら、ゆるい上りになり、「山菜の店」という看板のある、一見食堂風の店の前で左折、長谷寺山門前に向かっていく。この食堂風の店が、本日の旅舎・吉野館である。

歩き続けて33km、ようやく到着。玄関先には「宝来講」の講札が掛かっている。近世の伊勢講では、指定旅舎に講札を置き、宿泊の目印としていた。これにならって、宝来講も第6回(1991)から、各旅舎に講札を掛けてもらうこととした。企画から製作に至るまで、宝来講OBの中でも一番の職人である吉瀬文人氏が腕をふるった。その労作の前には、旅館のおじさん、おばさんが出迎えてくれる。「ようこそ、おつかれさま」の言葉が心に響くようであった。

### 宝来講定宿帳（其の巻） 初瀬・吉野館

初瀬はいまでもなく長谷寺の門前町。十一面観音を本尊とする長谷寺は、真言宗豊山派の総本山。また西国霊場巡礼の八番札所として、多くの参詣者を集めている。宝来講では、2日目の朝の長谷寺詣でがひそかな慣例となっている。そこで、寺に関しては翌日朝の項を参照していただくこととして、ここでは門前町と吉野館についての話をし。

吉野館の前には「長谷寺黒門跡」の看板がある。推定では吉野館から3～4軒長谷寺寄りであったのではないかと。ちょうどこの付近がもっとも古い門前町の入口に当たり、かつてはこの黒門を境に寺家と在家を分けたのだという。

さて、長谷寺の門前町は「隠口(こく)の泊瀬(はせ)」といわれた谷筋を、桜井方面からずっと直線状に上り詰めてくる。しかし、寺のすぐ近くまで来たところで行く手と喜山に遮られ、左へ曲折、ここで初めて山門に正対する。この道の曲折は、近世の人々にも印象的だったのか、「観音前角(かんのんまえかど)」という言葉で表された。

その「観音前角」にあるのが、宝来講定宿・吉野館である。現在のご当主につながる家筋が吉野館を継いだのは昭和初期の話。しかし、それ以前からここに「吉野屋」と名乗る旅籠があった。近世の旅籠案内『浪花講伊勢道中記御宿附』には、「くわんのんまへ角 よしのや平右衛門」とあり、大名の長谷寺参詣の場合には、一行の一部が分宿するなど、規模・格式とも上級の旅籠であったらしい(『榊丸』)。また、近世を通じて初瀬の本陣であった、とする説もある(『歴史の謎を解く』)。

ただ残念なことに、現在のご当主のお話では、これらを裏付ける史料・記憶などは存在せず、当時の吉野屋と本家分家などの関係があったかどうかについてもはっきりしない、とのことである。